

Title	マルカム・ノールズ著『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド-ともに創る学習のすすめ』, 渡邊洋子監訳, 京都大学SDL研究会訳, 明石書店, 2005年8月, 175p.
Author(s)	渡邊, 洋子
Citation	京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 (2006), 5: 155-157
Issue Date	2006-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/43895
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

【図書紹介】

マルカム・ノールズ著『学習者と教育者のための
自己主導型学習ガイド——ともに創る学習のすすめ』

(渡邊洋子監訳、京都大学SDL研究会訳、明石書店、2005年8月、175p.)

渡 邊 洋 子

Malcolm S. Knowles. A Guidebook on Self-Directed Learning
for Learners and Teachers — Encouraging to Build up Learning
by Mutual Participation, supervised by Yoko WATANABE,
and translated by Kyoto University SDL Study Group,
Akashi Shoten, Aug. 2005, 175p

(Japanese version of Malcolm S. Knowles, Self-Directed Learning -a Guide
for Learners and Teachers-, 1975).

Yoko WATANABE

本書は、アメリカの成人教育研究者マルカム・ノールズ（1913－1997）の著書“*Self-Directed Learning - A guide for Learners and Teachers*”（1975年）の日本語訳である。同書は、またタイトル通り、成人教育の教育者と学習者の両方を対象に書かれた「自己主導型学習」の実践ガイドである。また、講座や授業などフォーマルな学習場面での能動的かつ相互的な「学びかた」とそれを可能にする「学習援助のありかた」に関わる、コンパクトな実践書でもある。ノールズは長年の実践経験から、70年代アメリカの成人教育でまだ主流だった講義中心のスタイルが成人学習者の実態やニーズに合わないことに気づき、その脱却の可能性と方向性を研究者として模索しようとした。その理論的枠組が「アンドラゴジー」、そしてその実践的な学習モデルが「自己主導型学習」である。

本書のおもな目次構成は、以下の通りである。

用語解説

はじめに

第一章 「自己主導型学習における学習者とは」—— 学ぶ人への手引き

1 まず考えたいこと

2 探究プロジェクト

第二章 「自己主導型学習における教育者とは」—— 教える人への手引き

1 まず考えたいこと

- 2 新たな役割がどんなものかをはっきりさせる
- 3 自己主導的な学習者になるのを援助するには
- 4 ファシリテーターとしての役割を果たす

第三章 学習リソース編

- 1 学習全体に関わるリソース
- 2 雰囲気づくりと関係づくりに関わるリソース
- 3 学習ニーズを自己診断するためのリソース
- 4 学習の到達目標を設定するためのリソース
- 5 学習方法と学習リソースの活用のしかたに関わるリソース
- 6 学習の全体評価のためのリソース

附録 「学習契約」を使った学習のための指針

解題／索引

本書では、講義中心の学校教育タイプの学習形態は「教師主導型学習」と呼ばれている。ここでは、学習場面の主導権は学習全般（目的・内容・方法・評価など）において教育者側に集中しやすい。このため、学習者は好むと好まざるとにかかわらず、受動的姿勢に陥りがちである。それに対し「自己主導型学習」は、学習者自身が自らの学習プロセス全体に主導権を発揮し、責任をもって関わるものである。具体的には、仲間集団との協議や教育者による援助のもとで、学習の流れや手だて、そこに関わる諸要素のあり方を決定し、自発的・能動的に学ぶ活動を行う。本書では、このプロセスの意義と流れ、各場面での課題や留意点について、学習者と教育者の両方の立場から言及されている。そして、両者の対等なパートナーシップを保障するための「学習契約」「学習リソース」などのツールが登場し、活用の可能性が開かれている。

本書を手がかりに、読者は、これまで自らがどのように「学習」や「教育」に携わってきたのか、振り返ってみることが可能になるだろう。また本書における「自己主導型学習」の実際を、私たちの日常的な行為やコミュニケーション、相互の関係性、日本の文化・社会的な文脈での「学びの様式」、その中での「暗黙知」や共同性などと照らし合わせながら、実践的な観点から検証してみることも、意義ある取り組みである。そこから、私たちあるいは一人一人の「私」にとっての社会・文化や生活・状況に根ざす学習のあり方、学習方法論、そこでの学習環境の醸成や学習援助のあり方などの探究が可能になると考える。学習・教育活動に何らかの形で関わる方々すべてに、一読をお勧めしたい。

本書の訳出作業は、京都大学SDL研究会の1年半以上に及ぶ、熱心で集中的な活動を基盤に行われた。同研究会は、講読演習で本原著を取り上げた監訳者と、同演習に熱心に参加し、かつそれを契機にノールズのSDLの考え方に大変興味を抱くようになった当時の大学院生諸氏とで構成された。作業・訳出の分担は本書「訳者紹介」の通りだが、分担箇所については、長時間に及ぶ研究会・検討会を重ね、全員がねばり強く全体に眼を通す作業を繰り返し行った。この意味で、各分担箇所には、共同作業の要素が多く含まれる。完成した翻訳草稿をさらに渡邊が単独で引き受け、ノールズ自身の執筆意図、読者への読みやすさ・わかりやすさ、全体の

統一などの観点から何度も読み直し、大胆なリライト・再編成の作業を施した。それゆえ、本書の成果は飽くまでも、研究会メンバー全員のものであるが、最終責任はすべて監訳者にある。

なお、監訳者を除く、同研究会のメンバーは以下の通りである。

倉知典弘（博士後期課程在学中）・佐伯彰彦（㈱東陶大阪販売勤務、龍谷大学大学院修了）

猿山隆子（博士後期課程在学中）・生津知子（博士後期課程在学中）

藤岡裕美（兵庫県庁勤務、京都大学大学院修了、神戸大学大学院博士後期課程在学中）

* 本書についての原稿は本来ならば、関係者以外による「書評」という形で掲載すべきものであったが、諸般の事情から調整が間に合わず、果たせなかった。監訳者自ら「宣伝」するのは、はなはだ気が引けるが、生涯教育学講座の教育活動の一環であるとともに、院生の研究活動の成果の一部とも考え、2005年度の講座の活動報告に加えることにした。本書の詳細な検討や、その内容を踏まえた、メンバーによるさらなるS D L研究の成果については、別稿を期したい。